様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２４８５

研究課題名（和文）日系アメリカ文学を支えたアメリカの文学者たち－東西文化の混交と日本観の形成

研究課題名（英文）American Writers who Supported Japanese American Literature: Encounters of Eastern and Western Cultures and Formation of the View of Japan

研究代表者
水野　真理子（Mizuno, Mariko）

富山大学・学術研究部教養教育学系・准教授

研究者番号：４０７５０９２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、19世紀末から20世紀初頭にかけての日系アメリカ作家について、彼らを支えたアメリカの作家・文学者との交流に留意し、作品に描かれ、またアメリカ社会で受容された日本観を明らかにするものであった。まず日本観の主要な型を提示したハーンの作品と、アメリカでの受容について整理した。続いて、1920年代半ばに活躍したエツ・スギモトの作品と日本観をまとめ、ハーンとの比較を試みた。加えて、英語で詩や小説を発表した詩人ヨネ・ノグチが描いた日本人女性像を検討し、アメリカの女性作家たちの影響を確認した。また日本文化紹介者の役割を引き継いだノグチとハーンの間にみられる日本文化理解の共通性も考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、まずアメリカにおける日本観について、ハーン作品の書評を調査、整理し実証的に明らかにした点である。日本観については、これまで主に日本を訪れた外国人の著作に描かれた日本像を明らかにすることに主眼が置かれてきた。またノグチやスギモトら日系アメリカ作家と彼らが生み出した日本観についての考察も、先行する日本観研究にはほとんど見られない視点であった。さらに、ハーン、ノグチ、スギモト、彼らを支えたアメリカの作家たちの交流や影響関係にも留意した。日本観に関する研究の中で不足していた視点を補い、日系アメリカ文学に描かれた日本観と作家たちの影響関係を提示したことが、本研究の学術的意義と言えよう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to explore the views of Japan described in the works created by Japanese American writers or their views accepted in the American society focusing on the relationships between Japanese American writers and American writers from the late 19th century to the beginning of the 20th century. First, I clarified the view of Japan described by Lafcadio Hearn and how it was appreciated among American readers. Then I considered the view of Japan explained in the works of Etsu Sugimoto, who was gaining attention among American readers in the mid1920s, and I compared the view of Japan explained by both of them. In addition, I analyzed the image of Japanese women described in Yone Noguchi's works and considered the influence of American women writers on that image. I also explored the common aspects of their understandings of Japanese culture by Hearn and Noguchi.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：日系アメリカ文学　日本観　ラフカディオ・ハーン　ヨネ・ノグチ　エツ・スギモト　加川文一　トシオ・モリ　ヒサエ・ヤマモト

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

「日系アメリカ文学」の研究は、アメリカにおいては 1970 年代半ばから、アジア系アメリカ人運動の興隆とともに発展してきた。日本においては 1980 年代頃から、アジア系アメリカ文学研究会を中心に行われてきた。「日系アメリカ文学」は一世や帰米二世たちによって日本語で書かれた日系日本語文学と二世、三世以降の作家によって英語で書かれた日系英語文学という二つの流れが存在するが、これまでの研究では、主に英語文学が対象となり、さらに作品解釈が主流であった。そうした先行研究の間隙を埋めるために、筆者は日系日本語、英語両方の文学を対象とし、また文学作品の解釈に力点を置くのではなく、作家、作品を含めた文学活動全体を歴史的に記述するという試みのもとに『日系アメリカ文学の歴史的変遷―1880 年代から 1980 年代にかけて』（2013）を上梓した。この研究において、筆者は日系アメリカ文学がアメリカ社会において認められる際に、アメリカ社会で活躍する文学者や編集者などが、日系の作家たちを支えていたケースが多々あることに気づいた。その例が、日本人詩人のヨネ・ノグチ、呼び寄せ一世の詩人加川文一、二世作家のトシオ・モリやヒサエ・ヤマモトである。ヨネ・ノグチに強い影響を与えたのは、詩人のウォーキン・ミラーであり、彼の執筆を支えたのはレオニー・ギルモアであった。詩人加川については、英詩人イヴァ・ウィンタースが彼を支えたが、ウィンタースは同時に、1950 年代、作家として頭角をあらわそうとしていたヒサエ・ヤマモトにも助言を与え、親交があった。トシオ・モリをめぐっては、彼の作品を高評価したウィリアム・サロイヤン、さらにモリを含む 1930 年代頃の二世文芸人たちを、マイノリティ文学の興隆を目指すものとして激励した作家ルイス・アダミック、批評家ケアリ・マクウィリアムズらがいる。

また彼ら以外に、日本人女性作家のエツ・スギモトとその作品『武士の娘』などに、高い関心が寄せられ、彼女の作品がなぜアメリカ社会においてベストセラーとなるほどの好評価を得たのかも、研究者たちの関心を誘う問題として急浮上してきた。彼女を支えたのは親友のフローレンス・ウィルソンであるが、編集者のクリストファー・モーリーも出版を後押ししたと言われている。さらに、彼女の作品がどのようにアメリカの文学雑誌で批評されたか、それらの記事も復刻され、貴重な資料が入手可能となった。

こうした、まだ萌芽としての点状の事実をつないでいくことで、何が明らかになるかと考察した際に、これらの作家たちがアメリカ社会で認められる背景を探ることによって、19 世紀末から 20 世紀半ばにかけての日本が、アメリカという西洋社会から、どのようなイメージを持って見られていたか、またどのような文化だと捉えられていたのかを明らかにすることができると思い至った。19 世紀末における西洋の日本の文化、文学イメージについては、日本を訪れた西洋人たちの残した著作や、また西欧美術における文化運動ジャポニズムをキーワードとして、相当の研究蓄積が積み上げられてきた。文学においても、僅少ではあるがアメリカにおけるジャポニズム小説についての先駆的研究が存在する。ただ、これらの先行研究においては、日本の文化、文学イメージというのは、主に本国日本のイメージと関係しており、またアメリカの文学世界で認められた日本人作家も、「日系アメリカ文学」というカテゴリーにおいて捉えられるのではなく、ある個人の日本人作家として認識される傾向があった。しかし、実際にはその日本人作家が在米日本人社会と何らかの接点を持っていたことも確かであり、また本研究が対象とする年代（19 世紀末から 20 世紀半ば）においては、西海岸を中心に日本人移民の排斥問題、ならびにそれを原因とする日米関係の悪化という問題は存在し、それらが日本人や日本文化のイメージ形成と関連性がないとは考えにくい。したがって、アメリカにおける日本人のイメージ、および英語で書いた日本人作家・作品の受容の問題に、「日系アメリカ文学」およびその文学活動という視点を投じることには、意義があると思われた。「日系アメリカ文学」研究の分野においても、主流であった研究の焦点は、日系作家が作品に何を描いたか、作家が何を見たかということであり、その逆の視点、日系アメリカ作家を欧米人がどのように捉えたかを包括的に扱う研究は、筆者の知る限り極めて少ない状況であった。

こうした背景を踏まえ、本研究は、19 世紀末から 20 世紀半ばというおおよそ半世紀の時間幅において、通史的に幾人かの該当する日系アメリカ作家たちの例を、彼らを支えたアメリカの作家、文学者たちとの交流に着目し、なおかつそこに表れる日本観を明らかにしながら、アメリカにおける日本観形成の研究に、新たな知見を加えるという意図のもとで開始した。

２．研究の目的

本研究は、19 世紀末から 20 世紀半ばにおいて、「日系アメリカ文学」として含まれるいくつかの作品、そしてそれらを生み出した作家たちが、アメリカの文学関係者たちにどう支えられ、評価されたのかを明らかにすることによって、日米、および東西異文化の接触と交流、そして日本観形成の研究に、日系アメリカ文学分野からの新たな史実を加えようとするものであった。具体的には、①これまでに研究されてきた 19 世紀末のアメリカにおける日本観②ヨネ・ノグチの作品に描かれる日本観や日本人像、それらがアメリカの読者たちにどう受け止められたのか、また彼と交流を持った主に女性作家たちのノグチに対する影響③エツ・スギモトの作品に描かれる日本、それがアメリカの読者たちにどう受け止められたか、スギモトを支えたフローレンス・ウィルソンやクリストファー・モーリーがスギモトの作品を通してみた日本はどのようなものだったか④呼び寄せ一世詩人加川文一、二世作家ヒサエ・ヤマモト、トシオ・モリらが描いた日本、彼らを支えたイヴァ・ウィンタースやウィリアム・サロイヤンが、彼らを通してみた日本像や日本文化とは何か、これらの問題点を明らかにすることが目的であった。それによって、日本

を訪れた外国人の著作に描かれる日本像や、ジャポニズム小説に描かれる日本像が中心的であった日本観研究に、日系アメリカ文学の視点から提示された日本観、および日系アメリカ作家と交流を持ったアメリカの作家たちが彼らを通してみた日本、およびアメリカの読者たちに受容された日本観を、明らかにすることを目指した

３．研究の方法

研究方法としては、①先行研究の再検証により問題の所在を把握、②著作、自伝、伝記、雑誌記事など文献の読解と分析、③新たな資料の調査、収集とその分析、④全体を通史的に把握、分析し、結論を導き出す、という文献調査・読解中心の手法で行った。その際には、幅広い視野と個々の緻密な資料分析という、マクロとミクロの両方の視点が必要となった。新しい資料の調査・収集、および新たな史実の掘り起しには、県内外、国外の大学他公立図書館等へ出向き、新聞のマイクロフィルム資料、文学者たちの書簡など特別な個人資料の閲覧と複写が必須であり、それらも積極的に行った。復刻版などの資料については、先行研究で見落とされていた事項などがないか、詳細に読解した。また、独善的な研究にならないよう、定期的に、関連の研究会、学会で発表し、批評、助言の機会を得た。

具体的には、まず 2016 年度は、19 世紀半ばのアメリカにおける日本観についてその概要を先行研究により把握した上で、特にラフカディオ・ハーンの日本関連の作品について、アメリカで発表された書評を Hathi Trust などのサイトから収集し、数量的に整理した。さらに『日本―一つの解明』（*Japan: An Attempt at Interpretation*）(1904)を主に取り上げ、作品の中にハーンが描いた日本像とこの著作の書評から読み取れる日本像を分析した。2017 年度は、主にハーンによって提示された日本像を踏まえ、復刻済みのエツ・スギモトの初期短編やエッセイなどの作品を資料に、そこに描かれた日本像を明らかにし、それとハーンの描いた日本像との比較、またスギモトと交流のあったクリストファー・モーリーが彼女の作品をどう捉えたのかを、彼がスギモトについて書いた新聞記事を調査し、考察した。続く 2018 年度は、ヨネ・ノグチの『日本少女の米国日記』に描かれる日本像、日本人女性像を明らかにし、その作品の書評記事を集め、その内容をまとめることで、アメリカ読者にどのように受け入れられたのかを分析した。またその日本人女性像に、ノグチの原稿の推敲を担当したレオニー・ギルモアら女性作家がどのような影響を与えていたのかを、書簡資料などから考察した。2019 年度はノグチに与えたアメリカの女性作家たちの影響を再考し、またノグチの日本人女性像を、同時代の日本人作家たちに描かれた日本人女性像と比較検討した。さらに帰国後のノグチが描いたアメリカや日本人女性作家たちについてのエッセイを調査、読解し、ノグチの日本人女性観の変化を探った。またハーンの日本文化理解とノグチの日本文化理解の共通性について、俳句理解を手がかりに両者の著作から分析した。そして、最後に加川文一、ヒサエ・ヤマモトとイヴァ・ウィンタースの交流を、彼らの書簡資料を再読し、その概観を掴んだ。また加川、ヤマモト、トシオ・モリらが置かれていた 1930 年代の日系社会と日米関係に関して考察した。

４．研究成果

第一に、本研究の出発点として把握すべき日本観について、その主要なイメージの一つが、やはりラフカディオ・ハーンの日本関連著作によって作り上げられていることを、イギリス、アメリカで出版された雑誌の数多くの書評より明らかにすることができた。1899 年から 1906 年までに 35 種類の雑誌に書評が掲載され、ハーンは日本の良き理解者、紹介者として高く評価されていた。特に『日本―一つの解明』の多くの書評では、神道に根差した日本文化や国家秩序という日本イメージについて、ハーンが科学的に納得のいく説明をしたと、評者たちは論じている。その一方で、ハーンが科学的にその日本の神秘性を解明しようとした意図に反して、神秘的な国日本というイメージが 1880 年代から 1910 年代頃までに作り上げられていたことを確認することができた。このような日本観を踏まえて、日系アメリカ作家たちの描いた日本が、どのような日本観を提示し、アメリカ社会でどう受容されたのかという問題が、次の考察点となった。

第二に、ハーンが日本の紹介者としての高い評価を欧米読者の間で獲得していたのとおおよそ同時期に、ヨネ・ノグチは、ジャポニズム小説の時流にも乗りながら『日本少女の米国日記』（*An American Diary of a Japanese Girl*）（1902）『日本少女の小間使い日記』（*The American Letters of a Japanese Parlor Maid*）（1905）を出版する。『日本少女の米国日記』に関しては、ジャポニズム小説に描かれる間違った日本イメージにノグチが違和感を覚え、真の日本像を描くという意図があったとも言われている。しかし、そこに描かれる日本人女性の朝顔嬢は、同時代に書かれた樋口一葉ら日本の小説や、元田永孚編纂『幼学綱要』(1882)、西村茂樹編『婦女鑑』（1887）などに描かれる良妻賢母的日本人女性像とは全く異なることが、それらとの比較によって改めて明らかとなった。朝顔嬢は日本の女性が置かれている境遇を批判し、その一方、日本人女性の目からアメリカの慣習や文化を眺め、さらには日本人移民たちのアメリカでの苦しい生活にも目配りをするという視野の広く進歩的な女性として描かれていた。そして、『日本少女の米国日記』に描かれる進歩的女性像は、ノグチの執筆を支えたレオニー・ギルモアら、アメリカの女性作家たちのイメージが重ねられていることを、ノグチとギルモアらの書簡資料からも再考した。また、自立した進歩的、理想的女性像が描かれたからこそ、女性作家たちの活躍が目覚ましいアメリカにおいて『日本少女の米国日記』が多くの読者を得たのでもあり、ジャポニズム

小説に描かれるような、西洋人男性と恋愛関係に陥り結果的に捨てられてしまうという、日本人ムスメ像とは異なる新たな日本人女性像が、アメリカ読者の間で人気を得たことが分かった。

第三に、ノグチに続き、特に日本人作家（日系アメリカ作家）として、アメリカでの日本観形成に影響を与えたと考えられるのは、エツ・スギモトである。スギモトは 1901 年から 1902 年の間には『シンシナティ・インクワイアラー』や『ブルックリン・デイリー・イーグル』に、1916 年から 1918 年には『シンシナティ・インクワイラー』『イブニング・パブリック・レジャー』に日本に関する短編小説やエッセイを発表した。それらの作品には、日本の文化的行事や一般家庭における慣習などが丁寧に描かれ、家庭的な視点から、日本の昔話の再話と思われる手法も使いながら、物語が綴られている。そして 1923 年からは雑誌『アジア』に「武士の娘」を連載し、1925 年には『武士の娘』（*A Daughter of the Samurai*）を出版した。彼女が作品に描いた日本像を探るのと同時に、彼女の作品の受容と日本観についても考察を広げたところ、編集者のクリストファー・モーリーが、スギモトは日本文化を紹介し、アメリカとの文化的交流を促す大使のような役割を有していると称賛し、その姿は日本紹介者として知られていたハーンとも通じると述べていたことが確認された。また『菊と刀』の著者ルース・ベネディクトもハーンの著書を自著の中で引用しているが、それ以上にスギモトの『武士の娘』からも影響を受けていることが再確認され、そしてベネディクトがスギモト自身のアメリカとの出会い、文化接触という生き方を例にとり、封建的な日本文化と民主主義的アメリカ文化の差異を導き出していることも確認された。加えて、ハーン、スギモト、ベネディクトの日本観の捉え方を比較すると、そこに未開の文明にこそ美が宿る、未開の文明を先進国が開明に導くというコロニアリズム的視点も垣間見えることが、興味深い点として浮かび上がった。

第四に、19 世紀末から 20 世紀初頭までの主な日本観を形成したハーンの日本文化論は、ハーン亡き後、日本文化紹介者の役割を実質的に担ったと考えられるノグチの日本文化論と共通性を持っていたことが、両者の俳句理解によって明らかになった。20 世紀初頭の詩のモダニズム運動や芭蕉による発句の再評価の気流も影響し、俳句にみられるような極度に短い言葉の中に、広大なイメージや哲学的思想を盛り込むという日本文学の特徴を、ハーンもノグチも高く評価していた。1910 年代半ば以降からは、ノグチが積極的にその日本文化イメージを西欧諸国に向けて発信した。

第五に、1920 年代末から 1930 年代にかけて、呼び寄せ一世詩人加川文一、二世作家ヒサエ・ヤマモト、トシオ・モリらが頭角を現していくが、彼らが描く日本のイメージは、日本国そのもののイメージというよりも、日系アメリカ社会を体現するイメージとして捉えられるようになり、アメリカの多文化社会における、他国を出自とするマイノリティの文化の一つと理解されるようになっていったと推測された。それは、例えば、加川の詩作に影響を与え、彼に助言を与えた、詩人イヴァ・ウィンタースが加川の処女詩集『秘められた炎』（*Hidden Flame*）（1930）に寄せた序文において、アメリカに移民としてやって来た加川のアイデンティティの揺らぎが、彼の英詩を特徴づけていると述べていることからも窺える。これらのテーマについては、さらに 1930 年代以降の日米関係も考慮しながら、今後深めていく必要がある。

以上のように、本研究においては、従来の日本観研究に、日系アメリカ文学の分野からの日本観やその受容、作家間の影響関係や類似点、差異についての新たな考察を加えることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 水野真理子	４．巻 5号
２．論文標題 『日本少女の米国日記』に描かれる日本人女性像をめぐって	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ヨネ・ノグチ学会ニューズ・レター	６．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水野真理子	４．巻 4号
２．論文標題 ハーンとエツ・スギモトー日本表象の系譜を探って	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ヘルン研究	６．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 水野真理子	４．巻 45号
２．論文標題 エツ・スギモトの初期作品ー日本文化の表象と作品の背景	５．発行年 2017年
３．雑誌名 研究紀要：富山大学杉谷キャンパス一般教育	６．最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5099/00018399	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 水野真理子	４．巻 1号
２．論文標題 日系アメリカ作家を支えたアメリカの文学者たち―ヨネ・ノグチと女性作家	５．発行年 2020年
３．雑誌名 富山大学教養教育院紀要	６．最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15099/00019981	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 水野真理子	４．巻 第５号
２．論文標題 ハーンとヨネ・ノグチ―日本の理解者として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ヘルン研究	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 水野真理子
２．発表標題 『日本少女の米国日記』に描かれる日本人女性像をめぐって
３．学会等名 ヨネ・ノグチ学会　第五回
４．発表年 2018年

１．発表者名 水野真理子
２．発表標題 ハーンとエツ・スギモトー日本表象の系譜を探って
３．学会等名 2018年度富山大学ヘルン研究会国際シンポジウム
４．発表年 2018年

１．発表者名 水野真理子
２．発表標題 ハーンはアメリカでどう読まれたかー『日本ー一つの解明』を中心に
３．学会等名 富山大学ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 水野真理子
２．発表標題 アメリカの文学界におけるハーン評とハーンを通した日本観―グールド『ラフカディオ・ハーンについて』をてがかりに
３．学会等名 富山大学ヘルン研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 水野真理子
２．発表標題 アメリカにおけるハーンを通じた日本観に関する研究計画と展望
３．学会等名 富山大学ヘルン研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 水野真理子
２．発表標題 ハーンとヨネ・ノグチ―日本の理解者として
３．学会等名 富山大学ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 河原典史・木下昭編	４．発行年 2018年
２．出版社 文理閣	５．総ページ数 260
３．書名 移民が紡ぐ日本ー交錯する文化のはざまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考